

いつも一緒に 富山のペットたち

近年の獣医療の発達と、飼育環境やフードの充実などにより、ワンちゃん、ネコちゃんの寿命は20年前に比べてかなり延びました。その一方、高齢化に伴い、腫瘍の発生率が高くなってきました。現在ワンちゃんの死亡原因の50%、ネコちゃんの死亡原因の40%を占めています。そんな

腫瘍の中で今回は口腔内腫瘍(口の中のできもの)について解説します。



小池 博行

チェルシーアニマルクリニック院長
(富山市上飯野)

口腔内腫瘍

口腔内腫瘍はワンちゃん、ネコちゃんにできる腫瘍の中で4番目に多く、ワンちゃんでは全腫瘍の6%、ネコちゃんでは3%を占めます。それほど多く感じないかもしれませんが、動物病院では、日常の診療でたまたに見掛けます。飼い主さんが見つけるケースも珍しくありません。口の中から出血していたり、あくびやほえたりした際に「何かある!」という風に気付く場合もあります。一方で全く気が付かず、発見が遅れることもあります。

瘍から、悪性腫瘍である悪性黒色腫、線維肉腫、扁平上皮癌、骨肉腫までさまざまなものがあります。良性か悪性かは細い針を刺す細胞診で判定できます。また、できものを切除して行っ

病理検査(外注検査)などで確定診断を行います。口腔内腫瘍の中でも最も多く、そして最も悪性度が高いのは悪性黒色腫、通称「メラノーマ」と呼ばれる腫瘍です。メラ

ノーマは黒色のできもので、皮膚にもできる腫瘍です。リンパ節や肺などに遠隔転移する確率が非常に高く、口腔内腫瘍では最も怖い病気とされています。

動物も「ワンちゃんネコちゃんドック」として、普段の動物病院での触診、聴診だけでなく、血液検査やレントゲン検査、超音波検査、尿検査などを組み合わせることで、腫瘍の早期発見

顎切除で悪性腫瘍完治を

このメラノーマを含めて、悪性腫瘍の治療は外科手術が必須になります。腫瘍だけ切除すれば大丈夫というわけではありません。再発や転移を防ぐには大幅に組織を摘出しなければならず、顎の骨ごと大きく切除する場合があります(顎切除)。

腫瘍が小さければ小さいほど、顎切除により完治を目指す可能性が大きくなります。また小さければ切除する範囲も小さくて済むため、見た目の変化を最小限にとどめることができます。顎切除後は、ごはんを食べたり水を飲んだりすることができなくなるわけではありません。初めは補助が必要ですが、だんだん慣れてきて自力で採食ができるようになります。手術後は補助的に抗がん剤を使用したりすることも多いです。

早期発見が大切

口の中の腫瘍に限らず、全ての腫瘍は、早期発見できれば完治が見込めます。人間も定期的に人間ドックを受けるように、

「いつも一緒に 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載します。



下顎にできたメラノーマ
下顎を切除した後の写真。食餌も問題なく、見た目の変化もあまりない

